



中村俊定文庫
文庫 18
11



知連抄

並梵灯連語

知連抄
並梵灯連語



知連抄



二 近來の上手ハ救済園阿也侍公が風躰ハ
 ことを直に去て更に求る所なし、かゝり幽
 言にして

雨にちる花の夕の山鹿

月のこる猶ばの雪の朝ほらけ

鳥の聲をい友と山起えて

加様の躰をありのまゝに花やかにして寄合
 を細付者也

一 園阿神ハ同寄合なれども一かとなくてハ
せさりし也 されハあふかち寄合に目をか
けすして

雲あれハいつる山にも月入て

朝かせの萩を夕に吹なして

山もとの嵐の上に雁なきて

松葉のうす雪までハ風ふきて

句ここにカか様にせし也 懸躰ハ侍公にも園阿

にも同心せしかとも不堪にして更本様ちん

十行 廿四

とに出すへき事にてハなけれとも諸方の連歌
に墨を付し也、されハ連哥を見事四五十カ
句にも過てや侍らん 然れども其中に竟地の
連哥十句にハ過しと覚侍也、或委座敷の物忌に
して叶す 或人に越れて更竟地連哥一年なし

大原野にて發句に

レ三才

いつ水みん嵐の紅葉松の雪

塩くこの雨の日はかり袖ほして

のこる身をみる人も猶つれなくて

忍よハ月さハ人の関路にて

入時は月にも山のかくされて
老る中く人にをくるい

是ならずてい我衣所ありと定る句いせさりし也
東西の遠國に就し捨たる懐帛布とのくたり
たらんをみては同よりもおどりて思へき也
とる人の吉躰と思は大略周阿か先地を学
也。されハ十ヶ年か間の連哥諸方より然る
こひしをみて吉連哥と思は皆周阿か凡躰也

比 此頃の連哥ハ只人を感して上にハいしけに聞れ

十行 廿四文字

とも下には更に我力なし されハ上今の連哥
を聞しぬ也。連哥ハ句ことに珍敷し有難く
いへは百々千々したる連哥にては侍れ 二三句
までもあらんするいめつらしかるべき也。能
了簡ありし

一 連哥ハ三種あり 上中下也。先上品の連歌ハ
未人の思寄ぬことを始て申出す也
凡情飽みて新しく詞意言にかり面白かりし
し。何なる上今も一度に一句二句着ハ三句の

し

外耳にとまる句は毎也。一年回会より點と
こゑし中に上品と覺し句の侍しを思出して
書侍也。

雪河かくして又やふらう舞
は句花よ吉句の姿なり

中品の連哥は心珍敷引かへてか、り面白花月
雪の常にある連哥を一かと有様にすうと中
品の連哥とい申也。

十行 世國字源

下品の連哥は凡情古物にて更珍敷事もな
くして賀秋のまつりに百々午々わたりたう句也
我こそいみしき事と覺へたれとも都といハ
さかハ萩といハ山下を云て執筆未筆もを
かさるに付たりなとす事餘はレ惜事也
更當座の扱恥も顧一座の損して行も不知也
寄合ハ先達のしたらんことハ申ニ不及我と新敷
見出したらんこそ殊更面白事にてあらんすれ
万葉なるとの事ハ底物なれハたやすくも侍稱

し四才

古今以来八代集の内はなとか稽古せん^ニ叶さ
らん 但初心の人くくハサのみ耳遠ならん。
寄合も不可好博氏万葉の寄合一座に三度
の外ハ不可好寄合の珠も^一きよりハ心の珠
敷^ニこそ面白當座も聞へ侍れ。

一 今時の連哥ハ上の五文字もて下^{とん}きん^(アザカ)あひし
らふ様にす也。さなけれハ上下はなれく^ニ
なる也。たとへハ梓弓引とつ、けても又とま
り所の五文字にてちとろの合しうハ可有又

下の句ハ所敷凡情ある一からす。一かと有や
う幽言なるし。

しり

一

連語ハ心靜にても不叶又物志にても不叶也先
連連哥を出せんと思ハ人時は上座を能くえ
つくろひて可出或女人或客人などの句枝た
る姿を伺て扇をたらし 執筆のあたりニ三人
の耳に入様に聲をやわらけてきし聲^ニにい
たす可し、又連哥の上手ハ下に吉きる物をきて
其上に帯をせぬやうにもすし。されハとて

小宛 あて
付合の契據
専らていはいは
争のしつぬめ
な言趣

一 連哥ハ小宛宛と云事あり可可也也 先ハ小
宛寄合の小宛詞の小宛也たとハ泰山と云に鳥
をは出出いい子子細細ななし 夜夜のの明明と云に鳥を付ハ鳴鳴枝枝
ををすすしし。是ハ心の小宛也。次ニ寄合の小宛
と云ハたハ杖杖と云に梨子梨子と付ハ無子無子細細親親の
子子を杖杖ななんと云に梨子梨子付た付たらんハ大大ににううかかふ
一一き也。次詞の小宛と云ハ先の浪とせんと思へ
とも前句にかへるとも立とも浪の所要の詞なく
ハ浪の字を不可出是より能く了簡すし

一 點ハ人による事にてあれハ只句かゝるをななししな
ああままににや 氏氏ことハななくく中中侍侍とも更更人の用
ぬ事也 上上手手もも遊遊者者ははよりよりくく 禁禁也
これこれも又人によるよるるへへききなり
先先人の連哥連哥おおああしたしたらんらんと用てと十十方方心心ををめめくら
して叶叶ははささらんらん時時ににいついつもの寄合寄合ををハハすすし
たたるる様様ににここせせくくととすするるは連歌連歌ののああかかららぬ也。
ささししききか連哥連哥ののああかかるる相也。始始よりよりしたしたくくめ
んんほほろろととここも無もももああろろし。大大ににたたりり高高くくや
たたるる様様ににここせせくくととすするるは連歌連歌ののああかかららぬ也。
先先人の連哥連哥おおああしたしたらんらんと用てと十十方方心心ををめめくら
して叶叶ははささらんらん時時ににいついつもの寄合寄合ををハハすすし
これこれも又人によるよるるへへききなり

十行、十四字詰

一 今時の連哥ハ餘に輪廻して句の躰不殊仍應安第
五式目に唯して少々しるせり。又同予七磨神皇
月大原望の十句の時の註注文也

一 陰^ニ木の下 下の字日月星の影^ニ各別也 不を

別とまる行^ニとまる歸^ニとまる別^ニ名殊

つゝむ^ニ忍 独祓^ニ別 文^ニ言^{葉カ}紫 文字^ニ文^ニ

つくま 鳴^ニ泪 袖の露に淚已上
十三句

一 やらん せん けん あらん 山四のてにいと

まり所^ニす^ニらす。中^ニおきてはくさしからず、

一句の体^ニ可隨 但^ニとめ 不明 くま^ニま^ニこと面白か

らんハ子細なし。

一 都^ニ堀 葛^ニ恨 須磨の山里^ニ入江 親^ニ子

奥山^ニ鳥のまの シホウ 着 悦^ニ樂^ニ 甚^ニ憂^ニ 愁^ニへ 亦

けす^ニ悲^ニ 不可付

一 互明の月とあらんにつ水あすと不可付。 在有明許

ハ可付也

一 瀧津^ニ瀬^ニおつ了ひ、き、涙^ニ 私作、詠ハ可付也 詠^ニの名不可然 又

詠^ニなかる、こほりつけず。但句によるへし。

十行 廿四半

一 冬の氷くたくるとつけす 又春の氷とくとつけす
 一 阿闍あせつすふ夜也 又あせつになけつとめ付す
 一 梅の宮うめのみやのまつり春也 又うめ榊さか取とハ夏なり
 一 天河あまがは舟ふねを結むすてハ氷水邊こほりづみ
 一 身みをしる雨あめと云い句くひんびんと不可付ふ
 一 秋あきの宿しゆく一行いっけいと不可付ふ 又あき春はるの雁かり数かず不可付ふ
 一 つれなきつれなきと不可付ふ 又つれなき須戸すうとの出舟いづねふね浦舟うらふね旅たび
 一 連つら哥うたのてにハ也。
 一 さりさりけりけりされいいははん 是こゝろを不可好ふ 鎌倉せむら
 一 たふ不可熱あつ

一 都みやこららき大字おほなご大内おほうち九重ここのへ大君おほきみ不可付ふ
 一 名なのある都みやこ秋風あきかぜ白川しろがはと不可付ふ
 一 千ちの花はな心の花こころのはなと云い句くにに而をああけけつけす
 一 遠山とほやまちかきちかきをつけす
 一 いいぞぞくくけけややきを不可付ふ 折越おれこたもきもふ也なり これも一也
 一 待まち恋こひと列り又また夢ゆめと稱なづ是こゝろ不可付ふ
 一 恋こひ速すみ懐なつの詞ことば無な子こ細こ 連つら懐なつ恋こひの句く不可付ふ
 一 待まち別わかるると云い句く夢ゆめ不可付ふ 又また獨ひとり祿ろくと夢ゆめつけす
 一 懐なつ命いのちの内うち落お花はなと云い句く又また櫻さくら散ちとせす
 一 山路さんじゆううつつららふふ菊きく不可付ふ 又また忘わるると云い句く情なさけ
 一 十行じゆじゆ廿四字にじふご

一 草木を一句してハ西方三句を可嫌
 一 深山櫻と云句に常の寄合不可然
 一 月なくて夜舟すがらす 又都の富士半時知す不付
 一 かくひに前の世とつけす 又くさきちかきつけす
 一 鳥と云句に鷺と付て又めくるとつけす
 一 吉野と云句にもろこしと付て松浦も夜宿と不付
 一 冬の時雨山めぐり不付
 一 すすましきと云句 風と不付 又打越にもさむきと不付
 一 水の花は夏也 又花の水取夏也 見教也
 一 浅に深つけす 以上七十三句嫌物也。

十行 廿四字

一 船路 = 鐘の周ゆるな人と云事不可然 誰波の可然也
 一 鳥の音 海道何なんとも不可然
 一 十三句の嫌物昔より少かはる也 山の下鹿鹿
 の遠聲
 一 三つのめ 賤の男、筏の棹 雨なる雲 みわたせばハ
 夕の雲 ながむ 山の霞 とり一跡 おのしき山 朝の雲
 一 賤のをたまたみ 以上十三句也 しよ
 一 秋の田川 極物 = 不在 かる 守 ひたとしん
 一 打越を可嫌
 一 夢は花月春 秋旅ちんとよせす、こゝの夢の心よき也

一 日去りま^つりま^え也 一 つくまりま^つり秋也
 一 賀茂のまつり夏也 一 神まつり秋也
 一 春りの祭春也 一 すいのまつり秋也
 一 連哥の病の事たとひ五文字の印めえわくとし
 何ともしいめし又終末とくある第一の病也
 一 つ小も同事也 是も心得^{べき}也
 一 同詞の病の事
 一 山陰ハ月^子や影のかくるる也
 一 影といふ字のけりた小も二あるハわろし^字の病也
 一 行句の病事

一 霧の岡 水春名所也 一 霧の岡 水春名所也
 一 衣の岡 同野水衣名所也 一 嵐の岡 水風名所也
 一 白河の岡 水水也 名重所也 一 紅葉の岡 水植物 水秋
 一 こまの岡 水生物 一 鹿嶋草 水生物 秋也
 一 ぼやあ^くの秋也 植物也 一 消^レテ^ル也
 一 十^行 廿^四字^詰
 一 霧の岡 水春名所也 一 霧の岡 水春名所也
 一 衣の岡 同野水衣名所也 一 嵐の岡 水風名所也
 一 白河の岡 水水也 名重所也 一 紅葉の岡 水植物 水秋
 一 こまの岡 水生物 一 鹿嶋草 水生物 秋也
 一 ぼやあ^くの秋也 植物也 一 消^レテ^ル也
 一 十^行 廿^四字^詰

一 落句の病の事

月またよいとほぬ花の曇りな
 月の夜も花も明るに惜まれ
 二句の連歌の何れも病也 花くもりは面白月はい
 たつら事と聞たり 是を名つて行題の病と云也
 今連歌にて行句の病と云事知し

夕暮に別し花を月よきて

是又花の面白も 花月何れも余りな(といふも)

春の花秋の月を用ひ 花の月なるを 夜の花はい

たつら物と云(す)まや 哥に落^題の哥とい たと一月の

十一行 廿四字

前の花とも花の下り月とも二物を賞観せす
 一を次に存す事を落題といふ也 詞の八病と云
 したれは連歌の四病と云也

一 連歌の五韻連聲五韻相通と云事あり 是ハ哥

にも連歌にてもおほく也 歌に是を以て大なる秘
 事と申也 是連歌聲の趣に詞のたよりを五
 七をきて其聲のすくくと下る様つくるを
 五韻連聲といふ也 又五韻相通と申に詞とさほ
 とつゝおほくも 五七五の切めに五韻のあつきのあ子
 をとくを相通といふ也 されは二種をほなゆ也

連歌をいたすに死せる人のこと論を以て
 是を^お一^さ也、人の形に生たずも死たずも言根五條に
 更に相かひりや、さしをも死ぬし物に甲斐あり也
 さしに^い^は^れは^らぬ、今^の連歌又是に^い可^知存^まし^のに
 文字の數ハ十七十四なるも、更^に連歌たり^の者ありし
 是^をい^はれ^を了^す字^の所^のらん、先^に五^音連^音の^題ハ^重
 西^の兩^段音^とに^まつ^てく^をと^云る^人の^詞をも^ちて^連
 聲^耳とい^ふ也、何れも是^をい^はれ^しい^ふさ^う也、次^に五^音相
 通^とい^はれ^る大^事也、凡^に連歌の^切め^にあ^るす^るて^に
 一の^字の^ひり^きあり^しく^{あり}や^様に^う子^と並^也名^目語^也

十行 廿四十六

アイウヘヲ カキクケコ サシスセツ タケツニト
 ナニヌネノ ハヒフヘホ マミムメモ ヤイエヘヨ
 ラリルシロ ウイウヘヲ
 は五音の終のかなは吉連歌に合てアイウヘヲノ
 り^りき^きあり^し 是^を皆^を五^音相^通の^連歌^也、是^に連^歌
 には大^事の^秘り^也、連歌師の中に^いは^れる^事を^よく
 する^物ハ^少し、連聲の^句ハ^相通^の句^{より}ハ^すこ^し
 や^すき^{なり}、先^に連聲の^字を^連聲^{にて}あ^らせ^し也
 薄^雲の^立井^のた^りか^らく^て
 雲の^立け^{あり}の^山の^{まつ}み^えて

よつて花の香や木すゑとうつららん。

是は五韻連聲の連歌也、是にて了簡あるべき也。

又五韻相通の連歌

遠山や茂るたよまよふらん

奥山やまたれし月ニ海ぬらん

散花や又面影にかへらん

此三句は相通してアイウヘヲノ三所のかなに吉最

くたしたり但アイウヘヲノ五の内ハ何れを上にし

ても五韻相通の句也 更今時のして是を知らたま

く知たす物も是を心にかけず無心解事のミ也

十行 廿四字流

旅人や散ぬ花にもあからん

散比ハさかぬ木にさへ花をみて

北山や空の戸ほそは月も存し

山人やあられと花も暮すらん

此等皆五韻相通の連歌也 惣て上手ハ皆五韻相

通を心にかけてする也、是則奥花也。至極の妙

事なり、連聲ハ詞存ハ上をかさり相通ハ内を

かけた也。連聲相通ハ父母のこゝし 初心らん連聲

を心にかけて上手に成て相通を案とすべき也。周阿

い殊ニ相通を心にかけてせし也。教済も又かくのこゝし

上四行

上四行

上三行

一 當世の連哥の風情を哥にて申へし
侍泊つる夜の河の舟にふりつみて

嶋の陰より雪を出たる 救済法師

坂 降ふらむ松の姿やそ水ならん

あもとに高き雪の一村 周阿法師

式二首の哥 何れも面白き姿なり 題詠も只同

物にて侍も 當座うしひも一首つうね侍也

閑思きやこの山里の木の戸の

花と主とはる一とは

加様に連哥の趣いありたくゆへとも更に

十行 十四字

か様にする物なり 哥の道もすたれ 連哥の師、
のすきもなく ことうん 敷きか 是ハ哥連哥
の道にハ陸分の秘事を書ぬす 相構ノ
無敷きの物にはいせらるすき也 さやくの物
のためには世益の事なり

抑代御抄名去應安元七二条大洞依當閑白殿御所

望抽和哥肝安被書し周阿九州下向之時最初斗御

案時分中下令所持、但上俗之後被只返於御前

心燒失フ其後無外見秘事の本也 金路之隆然

聖護院竹園御數寄之間嘉慶元年十一月九日

しよ才

凡躰比御抄二通被書花處也。
不可過し可神、
當道之真儀に傳

大同 御判

于時永享拾年林鐘十六以慈尊院本

書字者也

筆者判

外見比書
此書字之了不可有

梵灯近年隨分付たる連哥を仙洞へ御點被申下(處)
加様に被仰り也 同長踏二句外

應永廿二年二月 日

一番 左

さくらもくる、雪のうす、
風はなと文ふき花とをく

右

かちとる人のあきは拾少ね

あふことのかにわれ月や天の川

左詞つ、すけ合のよせ所非取俗凡情殊勝

二五七

二番 左

舟をまねくや岸さきいしの浦
野にかゝる根が尾花かなるみかた

右

竹あふまよとにちあや秋の勢

あき明す臥待月をひきみ

三番 左 勝

おなし谷をわいふる雲水

川音の雨より月が春の水きて

右

なみねを枕あきりのうたね

月ほもし^停流くやせん宵の雨

四番 左

鳥羽に存りてハキしるかハおね

夜もやれ月を美皇野の淀車

右

明るを夢のかすにこそしれ

又あつる涙のまくら宿あきて

五番 左

里たに月さむき松かせ

しハカ

十行 廿四字編

コクニ 185

木の葉ふき山こそ雲ハ時雨らめ

右

冬野、草をあるもみしかき

夏の夜の^忘もをわすれぬ月暮て

六番左

程ちかき山の草木も冬かれて

隣^{まに}もみす竹の雪をれ

右

袖 きは墨土染のいろ

雪のころ山も夕やなかりん

十行 廿四字詰

七番 左

焔も冬かきさむき山かせ

富士^には雪の夜なぐ月もなし

右

いさやおもふも人はうき人

あーさのいつのひまてか恨らむ

八番 左

ひらりぬる夜は秋もこゝろあし

夢に來て月まいたとやまたるらむ

右

一九才

西路ハかく備ぬ物を身に知て

あすりのこ水は月もつれ有し

右

朝西路ハの備ぬ命にけふ暮人

つれもか有し老の身の秋ハ?

十一番左

旅ハなから故郷あきは浮世にて

野にも山にもた、ありの宿

右

花のた、ハ恨なくてやかいらすし

十一番

しハのふちきりそ旅をとすな

十番左

別ハにもひハり位ぬ鳥聞て

クハアハもまくらもすそにあかつき

右

夏別ハまたしとまてや思ふらふ

たみたをみるも人ハとまらす

九番左

明ハいつる別の候夜をこめて

あふまつけても痛おもひ妻

九番

左右の露命而日さなき所なく
こそ侍小但左いとさしたは

十二番 左

あそふうらにしようきこはあう
思子のあやこそ年は竹や馬

右

世をや心にまあせさるうら

あき人よ我さきたるぬ袖ぬれて

十三番 左

おろかなるこそ心なりけれ

むかしこそ我にあはく思ふ身に

右

日本武劔を玉ふけしめにし

うらろ馬を雲をよこさる

け左番苦心透込優美かたき無比類者れ願
連哥之趣之可為本札

十四番 左

ふあかますまを思ふあ存し身

あいの山水川谷にもと、さうて

し三

十行 十四字語

し三

本云
宝徳三年南宮上の書字曰華

昔讀徳戸曰五反下旬之此也書字者也 追市
又可之 書改者也 此也

穴明く、勿き新外見

大概加校合者也

二三

二三

右

わういすし星の草ハその原
手にとくぬは、きい、なかく陰まきし
十五番左

舟の往來の難使すかすし
あしたき之松ありぼし朝ほりけ
右

七日にもりうすすかすかすか

寺すかすか、や泊瀬の川社

以上

十行 廿四字

二三

本書

東北帝大本

上巻部

(江戸時代寫本)

◎宮内省圖書寮本

下巻部

京都帝大本

上下巻揃

縦九寸八分餘

二十五張

横六寸九分餘

